様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科研費
KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３４４２１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ０２４７８

研究課題名（和文）上司小剣に関する研究基盤の構築

研究課題名（英文）Establishment of a research foundation for "Kamizukasa Shoken"

研究代表者
荒井　真理亜（Arai, Maria）

相愛大学・人文学部・教授

研究者番号：９０６１２４２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は、書誌学的な方法により上司小剣研究の基礎を築いたことにある。上司小剣（1874-1947）は明治・大正・昭和戦前期に膨大な著作を発表し、ジャーナリスト、そして小説家として活躍した。だが、これまでその活動の全貌が明らかになっていなかった。本研究では、上司小剣の著作を調査・分析し、4000点を超える著作をリスト化した。あわせて上司小剣の伝記的事実や同時代の評価に関する情報を収集し、それらをまとめて発表する準備を整えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
上司小剣の著作は歴史の一つの証言として貴重であり、文学だけでなく、言語、文化、歴史、芸術、教育、社会、経済等の研究にも利用可能な資料である。しかし、上司小剣には個人全集がなく、その著作のほとんどが埋もれたままになっていた。上司小剣に関する研究が遅れたのは、研究の基礎となる資料が整理されていなかったためである。本研究の意義は、上司小剣の著作の全貌を明らかにしたことで、上司小剣研究の基盤を構築し、様々な学問領域に有用な材料を提供できることにある。

研究成果の概要（英文）：This study found that the bibliographic method was used to lay the foundation for the study of Kamizukasa Shoken (1874-1947), who published several works during the Meiji, Taisho, and Showa periods. He worked as a journalist and novelist. However, not all of his writings have been examined in previous studies. This study investigated and analyzed Kamizukasa's writings and compiled a list of more than 4,000 works. Simultaneously, it obtained information on biographical facts about Kamizukasa and his evaluation by his contemporaries. Finally, these two compilations were prepared for publication together.

研究分野：日本近代文学

キーワード：上司小剣　日本近代文学　書誌　作家研究　出版文化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

上司小剣は「神主」（1908 年）で文壇に登場し、「鱧の皮」（1914 年）で文壇における作家的地位を確立した。「木像」（1910 年）や「父の婚礼」（1915 年）など、京阪情緒溢れる秀作で知られている。1897 年、上司小剣は読売新聞社に社会部の記者として入社した。その後、同社の社会部長・文芸部長・編集局長などを歴任し、1919 年に退社するまでの約 22 年間在籍した。社会主義に関心を持ち、幸徳秋江や堺利彦らと交わる一方で、島村抱月、正宗白鳥や徳田秋声といった自然主義者たちとも交流を深めていった。『読売新聞』に時評や論説、諷刺的なコラムを連載したり、自ら雑誌『簡易生活』（1906-1907 年）を創刊し小説や翻訳を発表したりするなどして、上司小剣は小説家としてだけではなく、ジャーナリスト、コラムニストとしても活躍した。

このような多彩な文筆活動や当時の文壇における存在感などをみても、上司小剣はもっと研究されてもよい作家の一人である。上司小剣の研究書として荒井真理亜『上司小剣文学研究』（2005 年）と吉田悦志『上司小剣論―人と作品』（2008 年）があるものの、日本の近代文学研究において上司小剣が取り上げられることは極めて稀である。徳田秋声や正宗白鳥などの同時代に活躍した作家たちに比べ、上司小剣の研究が進んでいないのは、研究の基礎となる資料が整理されていないからだと推察される。

一方で、前田勇『大阪弁』（1977 年）や村上謙「明治大正期関西弁資料としての上司小剣作品群の紹介および否定表現形式を用いた資料性の検討」（2010 年）、無署名「TAX TIDBIT 上司小剣・太政官・相続税」（2009 年）など、上司小剣の著作は文学だけでなく、他分野の研究においても援用されている。新聞記者として出発した上司小剣は社会の動向に敏感に反応しており、その言説や創作が時代状況を映し出しているからであろう。上司小剣の著作には歴史資料的な価値があり、文学だけでなく、他分野の研究においても有用な材料だといえる。

ゆえに本研究において上司小剣の著作を調査・分析し、上司小剣に関する研究基盤を確立する必要があった。

２．研究の目的

上司小剣は 1897 年から 1947 年までに膨大な著作を残している。既存の上司小剣の著作目録として最も詳しいのは『近代文学研究叢書 62』（1989 年）の「著作年表」であるが、この詳細な目録にもかなりの遺漏があることがわかっている。したがって、既存の目録に採録されていない著作を探し出し、上司小剣の著作目録を更新することが本研究の第一の目的である。併行して、主要な著作については解題を作成し、同時代の評価や先行研究などの情報もあわせて記載する。目録や解題は上司小剣研究の手引きとなり、今後の日本近代文学研究に資するところが大きいと思われる。本研究が書誌学的な方法によって上司小剣の軌跡をたどることで、上司小剣研究を進展させ、他分野の研究にもその成果を提供できればよいと考える。

３．研究の方法

（1）著作目録の作成

上司小剣は個人全集がなく、著書も絶版となっており、ほとんどの著作を初出紙誌で確認しなければならない。そのため、所属研究機関だけでなく、公共の図書館や文学館、他大学の図書館などに出かけていき、上司小剣の著作を調査した。図書館や文学館等で閲覧できないものは古書で探した。このようにして可能なかぎり著作の現物を確認し、書誌情報を収集した。著作の情報はデータベースで管理している。本研究で作成する著作目録によって、上司小剣の文筆活動の全体像を把握することができ、個々の資料へアクセスしやすくなることを目指した。

（2）著作解題の作成

上司小剣の膨大な著作のうち、主要な著作について解題を作成した。著作の現物を確認した際に、可能であれば当該頁を複写または撮影しておいた。複写または撮影が不可能で入手できなかった著作については、書誌情報を収集するために現物を確認した際、あわせて内容も確認した。解題には著作の概略だけでなく、同時代の評価や先行研究の情報なども記載している。そのため、著作の調査とともに、上司小剣について書かれた文献も収集する必要があった。個人全集や著作集等の刊行予定がなく、初出紙誌を入手するのも難しい現状において、上司小剣の著作解題の意義は大きいと考える。

４．研究成果

（1）著作目録の作成

平成 29 年度は、著作の現物調査のために既存の目録等の情報を整理し、上司小剣の著作に関する情報をデータ化した。『近代文学研究叢書 62』（1989 年）に収録されている上司小剣の「著作年表」では、約 2,000 点の著作がリストアップされている。また、日本近代文学館に一括保存されている「上司小剣コレクション」には、上司小剣自身が作成したものと思われる著作の切抜が 997 点ある。このうち、『近代文学研究叢書 62』に収録されていない著作が 447 点存在す

る。これらの情報をもとに約 2,500 点の著作リストを作成した。平成 29 年度から令和 3 年度まではこの著作リストをもとに現物の調査・収集に努めた。しかし、令和元年度末より新型コロナウイルス（COVID-19）感染症流行の影響で予定していた調査を中止せざるを得なくなった。本研究は上司小剣の著作の現物を確認することを基本方針としているため、図書館や文学館等での調査が研究の推進に不可欠である。資料は散逸しており、稀少な文献も多いので、現物確認のためには所蔵先へ出かけていかなければならない。しかし、先の事情により当初の計画通りに研究を進めることがかなわなかった。そこで研究期間を延長して著作の調査を継続し、令和 4、5 年度は主に既存の目録には採録されていない著作の捜索に尽力した。最終的に上司小剣は 4,000 点を超える著作があることが判明した。以下、特記すべき成果を挙げる。

① 著書の調査

38 冊を確認することができた。その過程で、既存の書目に採録されていない著書が見つかった。『短文集 金魚のうろこ』（1913 年）である。『金魚のうろこ〈生活・芸術叢書第三編〉』（1916 年）は以前から知られていたが、『短文集 金魚のうろこ』はこれと同名で内容の異なる本であることがわかった。そこで『短文集 金魚のうろこ』の内容を確認したところ、『小剣随筆その日その日』と同じ文章が収録されており、配列も同じであることが明らかになった。『小剣随筆その日その日』は 7 版を重ねたといわれるが、他にも『短文集 金魚のうろこ』のように内容は同じだが判型や装幀の異なる本が存在する可能性があり、各版の捜索が次の課題となった。

② 収録書の調査

上司小剣に個人全集はないが、その作品はしばしば文学全集や文学大系に収録されている。『現代長篇小説全集 16〈上司小剣篇〉』（1928 年）をはじめ、34 冊を確認することができた。『現代長篇小説全集 16〈上司小剣篇〉』には「東京」の第 1 部愛欲篇、第 2 部労働篇、第 3 部争闘篇がまとめて収録されている。「東京」の出版事情に関して上司小剣が挿絵画家である石井鶴三に宛てた書簡を手がかりに考察し、「上司小剣『東京』の出版に関する補遺―信州大学所蔵石井鶴三関連資料から―」（2019 年）を発表した。

その他の収録書として、上司小剣の「夏目漱石氏の『吾輩は猫である』」が収録されている夏目漱石著『吾輩ハ猫デアル 下』（1907 年）や、「冬の伊香保」が収録されている高木角治郎編『伊香保みやげ』（1919 年）など、計 107 冊を確認した。

③ 掲載紙誌の調査

新聞や雑誌などに発表された上司小剣の著作は約 4,000 点あった。なお、『近代文学研究叢書 62』の「著作年表」では、上司小剣が『読売新聞』に連載したコラムのうち、「編集室より」「銀座より」「一日一信」は 1 回分を 1 項目にして採録しているが、「その日その日」はまとめて 1 項目にし、その掲載期間を記している。しかし、これらのコラムはいずれも 1 回が独立した内容であり、複数の執筆者による分担執筆でもあるため、各回の発表日を明示しておく必要がある。そのため、本研究では「その日その日」も他のコラムと同様に 1 回を 1 項目にして採録した。

本研究において、「小王国」の存在を確認できたことは収穫であった。上司小剣は「処女作時代」（1924 年）のなかで、自分の書いたものが初めて活字になったのは『阪城週報』に発表した「小王国」という随筆の続き物であると述べているのだが、これまでその現物は確認されていなかった。調査を進めるなかで、連載第 1 回のみではあるが、『阪城週報』に「小王国」が掲載されているのを確認することができた。このことにより、上司小剣が文学者を志したのは上京する以前、すなわち読売新聞社に入社するよりも前であったことが確実となった。

上司小剣は 1897 年から 1919 年まで読売新聞社に在籍していたこともあり、約 1,800 点の文章を『読売新聞』に載せている。その際、本名だけでなく、複数の筆名を使い分けていたことがわかっている。「子介」や「風满楼」はすでに上司小剣の筆名として知られており、それらの署名記事は既存の目録にも採録されている。しかし、上司小剣は「三色」という筆名でも論説やコラムを書いていた。本研究では「三色」の筆名による 168 点の文章も目録に採録した。また、同紙に掲載されたコラムを丹念に調べ、単行本『小ひさき窓より』（1915 年）の初出に関する調査報告「上司小剣　読売新聞社時代の随筆「小ひさき窓より」」（2023 年）をまとめた。

上司小剣は『読売新聞』以外にも様々な新聞に時評や論説を書き、また連載小説を発表している。石井鶴三の挿絵とともに評判になった「花道」（1920 年）は『時事新報』に、「東京」第 1 部愛欲篇（1921 年）と第 3 部争闘篇（1924 年）は『東京朝日新聞』に連載されているが、上司小剣の新聞小説の多くは地方紙に発表されている。そのうち『九州日報』や『熊本日日新聞』への寄稿の事情について「上司小剣未発表書簡・長田幹彦宛三通」（2020 年）で考察した。

本研究では、食雑誌・宗教雑誌・業界紙・企業や病院の広報誌など、文芸誌や総合誌以外も探索した。このような雑誌の調査からも未確認であった著作を多数発見することができた。たとえば、『銃後の婦人』に連載された「才媛物語」（1938―1940 年）も『近代文学研究叢書 62』の「著作年表」には採録されていない。本研究では 33 回の連載を確認した。そのうちの 19 篇は随筆集『余裕（ゆとり）』（1941 年）に収録されている。「才媛物語」をはじめ、昭和戦前期の著作は、戦時下における上司小剣の立ち位置を考える上で重要な資料といえる。

ほかにも、上司小剣が『赤い鳥』に発表した童話 26 点を調査し、その特徴を分析した。それをもとに『赤い鳥事典』（2018 年）の「上司小剣」の項目をまとめた。また、『婦人公論』に連載された「森の家」（1919-1920 年）と「東京」第 1 部愛欲篇（1921 年）の画組から小説家と挿絵画家の協働の実態を明らかにした「上司小剣「森の家」「東京」の画組から見えてくること―信州大学所蔵石井鶴三関連資料から―」（2021 年）を発表した。

（2）著作解題の作成

平成 29 年度に上司小剣の文業を考える上で重要だと思われる著作をリストアップした。「その日その日」「簡易生活」「灰燼」「木像」「神主」「小ひさき窓より」「鱧の皮」「一日一信」「父の婚礼」「森の家」「花道」「ごりがん」「石川五右衛門の生立」「英霊」「東京」「災後の恋」「西行法師」「U 新聞年代記」「平和主義者」「恋枕」「伴林光平」などの著作について、(1) の調査と併行し解題の執筆を進めた。

以上により、次年度以降に上司小剣の著作目録と解題をまとめて発表する見通しが立った。

上司小剣の著作はジャンルや内容が多岐にわたっており、それゆえ、その文学史的な位置づけを明確にするのが難しかった。しかし、本研究によって上司小剣の著作の全体像が見えてきたことで、明治から昭和戦前期までの激動の時代を生きた上司小剣がその時々の社会の状況に反応しながらも、独自の地歩で文筆活動を続けていたことが明らかになった。上司小剣の文業を概観した上で、改めて上司小剣の言説や創作を検討する必要がある。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

1．著者名 荒井真理亜	4．巻 8
2．論文標題 上司小剣　読売新聞社時代の随筆「小ひさき窓より」	5．発行年 2023年
3．雑誌名 人文学研究	6．最初と最後の頁 59-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 荒井真理亜	4．巻 10
2．論文標題 上司小剣「森の家」「東京」の画組から見えてくること ー信州大学所蔵石井鶴三関連資料からー	5．発行年 2021年
3．雑誌名 信州大学附属図書館研究	6．最初と最後の頁 87-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 荒井真理亜	4．巻 5
2．論文標題 人文学研究	5．発行年 2020年
3．雑誌名 上司小剣未発表書簡・長田幹彦宛三通	6．最初と最後の頁 92-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 荒井真理亜	4．巻 8
2．論文標題 上司小剣『東京』の出版に関する補遺―信州大学所蔵石井鶴三関連資料から―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 信州大学附属図書館研究	6．最初と最後の頁 13-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

1．著者名 赤い鳥事典編集委員会　（項目執筆：荒井真理亜）	4．発行年 2018年
2．出版社 柏書房	5．総ページ数 664
3．書名 赤い鳥事典　（項目：宇野千代、上司小剣）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関